

# 修学旅行の歴史

—— 修学旅行はなぜ生まれ、どう進化を遂げてきたのか ——

たけ うち しゅう いち\*  
竹 内 秀 一\*

## はじめに

現在、修学旅行は「旅行・集団宿泊の行事」（小学校は「遠足・集団宿泊の行事」として、学習指導要領における特別活動のうちの学校行事の一つに位置付けられている。2017年と2018年にそれぞれ告示された小・中学校と高等学校の新学習指導要領でもその位置付けは変わっていない。

最近、台湾や韓国・中国などの学校が「修学旅行」で日本に訪れることが多くなっているが、この場合、参加するのは希望した生徒だけという募集型の「修学旅行」であり、当該学年の全ての生徒が参加することを前提とする日本の修学旅行とは異なる。修学旅行は、近代日本の学校教育が育んできた独自の教育文化であるといっていよい。

ここでは、その修学旅行のはじまりから今日に至るまでの移り変わりと現状、そして新学習指導要領の施行に伴い、修学旅行は今後どのような方向に向かうか、といった点も含めて概観してみたい。

## 1. 修学旅行のはじまり

修学旅行は、1886年2月に東京師範学校（この

\*公益財団法人日本修学旅行協会理事長

年4月に高等師範学校に改組、現在の筑波大学の前身）が実施した千葉県銚子方面での11泊12日に及ぶ「長途遠足」からはじまった、というのが定説である。つまり、修学旅行は、泊を伴う長距離の「遠足」からはじまったということになる。それでは、当時、実施されていた「遠足」とはどのようなものであっただろう。

日本における近代的な学校制度は、1872年に定められ、翌年施行された学制によって導入された。当時の学校では「国民皆学」のもと、教科教育を重視した教育活動が進められていて、現在の特別活動にあたる教育活動は「課外活動」として概ね軽視されていた。しかし、1885年に内閣制度が発足し、初代文部大臣に就任した森有礼が学校への兵式体操導入を奨励したことを背景に、たとえば運動会は、立派な兵士を育てるうえで、生徒の体格を向上させ「忠君愛国」精神の涵養をはかるための集団訓練、遠足も兵士が隊列を組んで行進することを模した「行軍訓練」という性格をもつ教育活動として実施が推奨されていく。いくつかの学校が合同で運動会を行う際、会場まで生徒が隊列を組んで行進していくのも「遠足運動」と呼ばれていたという（犬塚文雄編著『特別活動論』2013年）。前述した「長途遠足」も、その目的は

「一ハ兵式操練ヲ演習セシメ、一ハ実施ニ就キテ学術ヲ研究セシムル」ことにあると報告書（『大日本教育会雑誌』30号、1886年）にある。

ただしこの報告書には、「長途遠足ノ学術上ニ有効ナルハ教員一同ノ確認セル所ナリ。…若シ学術上研究スベキコトアルニ当ラバ充分ノ時ヲ之ニ用キ得ベキヤウ」とあって、この「長途遠足」が学術研究を重視して実施されたことがわかる。実際、生徒たちは訓練と併せて気象の調査や鉱物・貝類等の観察・採集、文化財・遺跡の見学などを行っている。

なお、「修学旅行」という名称は、1886年12月刊の『東京茗溪会雑誌』（高等師範学校同窓会の機関誌）第47号で、高等師範学校が同年8月に実施した下野方面への旅行記の緒言を「修学旅行記緒言」と題して掲載しているのが初見とみられる。

## 2. 修学旅行の普及と鉄道の利用

『文部省第十五年报』（1887年）に、師範学校で「修学旅行ヲ施行シ以テ地理ヲ探究シ動植物ヲ採集シ写景及ビ発火演習等ヲ為サシムルハ府県ノ概ネ挙行スルトコロ」とあり、この頃にはすでに、修学旅行が多く師範学校で実施されるようになっていたことが推測される。また、1892年に出された文部省令第8号の師範学校における学科等改正の説明に「適当ノ時期ヲ選ビ教員ヲシテ生徒ヲ率キテ修学旅行ヲ為サシメ、山川郊野ヲ跋涉シテ其身体及精神ヲ鍛練スルト共ニ、知見ヲ広メシメンコトヲ努ムヘシ」と記されていて、修学旅行の実施が奨励されている。

こうして修学旅行は、師範学校や旧制中学校などを中心に広がっていった。ただし、修学旅行が行軍訓練という性格を持つ以上、徒歩で行くことが当然であった。修学旅行でいつから鉄道が利用

されるようになったかは不明であるが、1889年に実施された第三高等中学校（当時は大阪に所在）の明石方面への修学旅行では、その費用として「神戸ヨリ大阪マデ汽車賃式拾銭」と計上されていて（『神陵小史』1939年）、この頃には鉄道も利用されていたことがわかる。ちなみに1889年は、東海道線の新橋－神戸間が全通した年である。鉄道利用の広がりには、修学旅行のもつ行軍訓練という性格をしだいに薄くしていった。

一方、1901年には、文部省令第3号中学校令施行規則第13条で「体操ハ普通体操及兵式体操トシ」と定められ、「兵式体操」は正課としての「体操科」の中に位置付けられた。これによって修学旅行からは「兵式体操」、すなわち行軍訓練の要素が分離され、現在実施されているような修学旅行のかたちができあがっていったとみられる。

## 3. 戦争と修学旅行

日清・日露戦争の勝利によって中国東北部（満州）に日本の勢力が拡大し、1910年に韓国が日本に併合されると、師範学校や旧制中学校ではいわゆる「満韓修学旅行」が実施されるようになる。早くは、1906年に福岡県立中学修猷館が、博多を出発して大連・奉天など中国東北部をめぐり、平壤・京城を経て博多に戻るという修学旅行を行っている（『修猷館七十年史』1955年）。「満韓修学旅行」は、明治末期から大正を経て昭和初期まで活発に実施されていたが、旅程に日清・日露戦跡の見学が組み込まれるなど、当時の国策に沿って行われている。ただし、「満韓修学旅行」は、1931年に勃発した満州事変、1937年から始まる日中戦争によって急速に減っていく。

一方、内地で実施される修学旅行では、伊勢神宮を中心とする神社仏閣や皇居への参拝、軍艦や軍施設等の見学がこの時期に盛んになる。たとえ

#### 写真1 1931年頃の某高等女学校の修学旅行



写真提供：(公財)日本修学旅行協会

ば、1914年に実施された下関市立下関商業学校の修学旅行の記録には、「桃山東西両御陵に参拝して明治の大業を追憶し奉り、伊勢神宮に参拝して国運の隆盛を祈」ったとある（『下商七十年史』1955年）。こうした動きは、昭和戦前期になると小学校へも広がっていき、修学旅行は、伊勢神宮参拝を主な目的とする「参宮旅行」といった性格を呈するようになっていった。この傾向に拍車をかけたのが、1937年に鉄道省が告示した「神宮参拝取扱方」（告示第98号）による鉄道運賃の割引である。そして、伊勢に行く途次に奈良・京都に寄るといった学校も増加していく。旅程に軍艦や軍施設の見学を入れる学校も数多くあったが、なかには東京開成中学校のように、修学旅行で生徒を戦艦山城に乗船させ、海軍生活を体験させた（1928年）といった事例も見られる（『開成学園九十年史』1961年）。

明治末期～昭和戦前期は、小学校から旧制中学校・師範学校に至るまで、修学旅行が学校行事の一つとして定着した時期である。その背景には社会全体の国家主義的な思潮があり、学校教育で敬神思想や国体観念を育成しようという国家のねらいがあった。修学旅行は、そのために広く実施されるようになったといえるかも知れない（写真1）。

しかし、戦時体制が強化され、鉄道が軍需物資

や兵員の輸送を優先するようになると修学旅行の実施はしだいに困難になっていった。そして、1941年8月に学校教員、学生生徒、団体旅客等に対する鉄道運賃の割引が停止されると、修学旅行はしだいに実施されなくなっていく。1944年、45年の修学旅行の記録は、現在のところ見当たらない。

#### 4. 修学旅行の再開と進化

戦後、学校教育が再開されると一時停止されていた修学旅行も、戦前・戦中とは性格を変えて再開されていく。

1946年には、早くも山口県立厚狭高等女学校が松江・大社方面へ3泊4日の修学旅行を実施した（『創立八十五年史』1957年）。その後も、修学旅行は続々と復活していくが、1949年10月に修学旅行を実施した福岡県立三潴高等学校の記録（『福岡県立三潴高等学校創立四十年史』1963年）に「五泊六日の京阪旅行も汽車はすしづめ、食べものは持ち込んだものだけ」とあるように、汽車は1ボックス6人掛けが普通、夜行列車を利用する場合、生徒は座席の下や通路の床に寝ていたという。また、旅館は米を持参しなければ宿泊できなかった。当時の修学旅行は交通事情・食糧事情の極めて悪い中で行われていたし、家庭の費用負担も大きかったと思われる。それでも実施されたのは、多くの学校が修学旅行の教育的意義を認めていたからであろう。

列車の混雑に関しては、修学旅行の実施時期が春と秋に集中していることが大きな要因となっていた。また、当時は旅行中の食中毒や感染症罹患、生徒の不良行為といった事態も頻発していて、一校ごとでの対応が難しくなっていた。そこで、修学旅行を複数の学校が合同で実施し、こうした事態に対応しようという動きが起きてきた。このよ

写真2 修学旅行専用車両「ひので」号



写真提供：(公財)日本修学旅行協会

うななかで修学旅行専用車両「ひので」号(写真2)・「きぼう」号の運行が始まる。品川－京都を結ぶ「ひので」号は修学旅行を合同実施する関東地区の学校を、神戸－品川を結ぶ「きぼう」号は関西地区の学校を、それぞれ連合体として1959年4月から輸送し始めた。その後、同様の専用車両が各地で運行されるようになり、課題であった混雑の解消や実施時期の分散化、事故防止等に大いに役立つこととなった。

なお、1958年には学校教育法施行規則が一部改訂され、小・中学校の学習指導要領に「学校行事等」という節が設けられた。これによって、学校行事の一つである修学旅行は、教育課程に正式に位置付けられるようになったのである。

1964年に東海道新幹線が東京－新大阪間での運行を開始すると、これを利用する私立学校が現れ始める。1968年からは東京都や北海道など公立高校の連合体が新幹線の利用を開始し、以後、全国の高校・中学校にも広がっていく。その結果、1971年の「きぼう」号の運行終了をはじめとして、修学旅行専用車両は次々に姿を消していった。

一方、修学旅行における航空機の利用については、海外での修学旅行を実施する一部の私立高校はあったが、公立高校では1978年に福岡県教育委員会が県立高校の沖縄への修学旅行に限って認

表1 国内の修学旅行先上位5(都道府県)

	中学校		高等学校	
	1980年度	2017年度	1979年度	2017年度
1	京都	京都	京都	沖縄
2	東京	奈良	奈良	東京
3	奈良	東京	東京	京都
4	熊本	千葉	広島	大阪
5	長崎	大阪	滋賀	千葉

出典：以下の図表は全て、日本修学旅行協会『修学旅行のすべて』1981年、同『データブック2018』2019年より作成

めたことが全国初となった(この年に沖縄修学旅行を実施したのは14校)。そして、航空機の利用が全国の公立学校に広がっていくにつれ、修学旅行の旅行先は大きく変わっていくこととなる。

## 5. 修学旅行の現状と課題

公益財団法人日本修学旅行協会では、毎年、全国の国公立および私立の中学校・高校を対象に抽出調査を行い、修学旅行の動向について分析している。これをもとに、近年の修学旅行の実状について見てみよう(以下の表および図は、いずれも日本修学旅行協会『データブック2018』より作成)。

国内修学旅行の場合、中学校は2泊3日、高校は3泊4日で実施することが多く、実施時期は中学校が3年生の5～6月、高校は2年生の10～12月というのが断然多い。中学校・高校ともに受験という関門があるため、時期の集中化を解消することは難しい。費用は、中学校が6万6,000円、高校が10万1,000円ほど。義務教育である中学校の場合、修学旅行は全員参加が当然であるが、現実には経済的な理由で不参加という生徒もいて、国や自治体からの補助金制度があるものの十分とはいえない。また、費用の4分の3以上が宿泊費と交通費に充てられていて、体験活動のための費用

図1 旅行費用の内訳と構成比

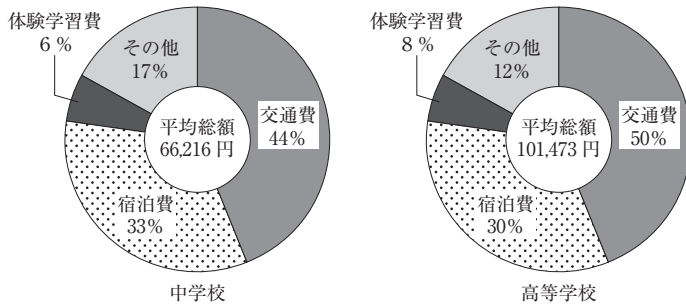
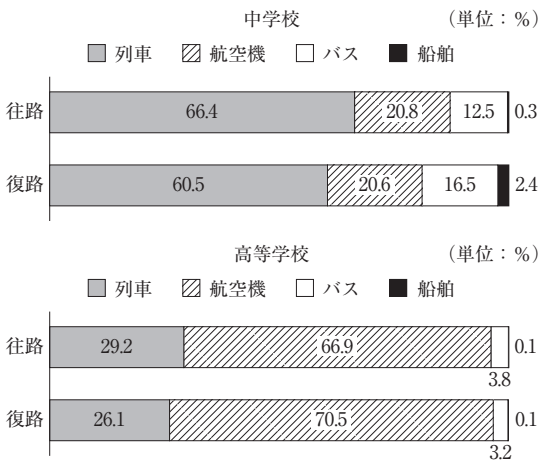


図2 修学旅行で利用する主な交通手段



が10%に満たないことも課題となっている(図1)。

次に、利用する交通手段であるが、中学校は列車が60%、高校は航空機が70%超となっていて、これが中学校・高校の旅行先の違いに現れている(図2)。

中学校の場合、旅行先は東日本からは京都・奈良、西日本からは東京・千葉が圧倒的に多い。京都・奈良は、学ぶべき文化財が豊富にあるというだけでなく、戦前・戦中とのつながりも考えられる。

東京もまた同様。千葉は、東京ディズニーランドができてからの新顔である。京都については、最近の外国人観光客の急増によって修学旅行に支障が出てきていることが課題となっている。高校では、航空機が利用できるようになってからは、

沖縄が常にトップを占めるようになった。北海道も人気があり、高校では遠隔地を旅行先とする傾向が強くなっている(表1)。

宿泊は、中学校・高校ともに洋室中心のホテルを利用することが主流となった(表2)。大部屋に多数が宿泊して「まくら投げ」というのは、もはや伝説化しつつある。

一方、急速に増えているのが農山漁村の民家に宿泊する「民泊」である。これは、ただ宿泊するのではなく、宿泊先の家族の一員として、その家庭の生業をはじめ暮らし全体を体験するものであり、新しい修学旅行のかたちとして今後も増加していくことが予想される。

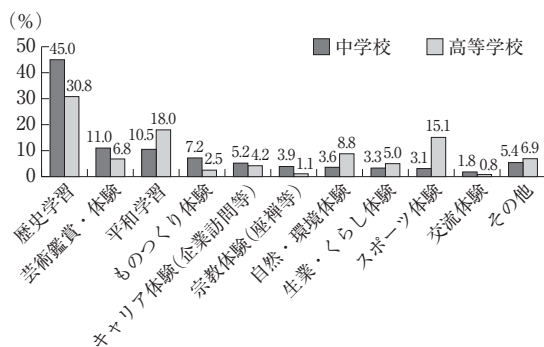
修学旅行での活動形態も進化した。かつては、バスガイドの案内で生徒たちがぞろぞろと名所旧跡を見学してまわる、いわゆる「見学・周遊型」が普通であったが、現在では多くの学校が班別自主行動を取り入れ、あまり移動せずに旅行先で様々な体験活動を行う「体験・滞在型」がそれに代わってきている。農山漁村民泊は、まさにその典型であるといえよう。

修学旅行のメインテーマは、歴史学習としている学校が多く、平和学習がそれに次いでいる。平和学習では、広島・長崎そして沖縄が旅行先の定

表2 利用宿泊施設

	中学校	高等学校
ホテル(洋室中心)	55.9%	75.3%
旅館(和室中心)	33.7%	17.3%
自治体所有・公共施設	0.3%	0.1%
国民宿舎・休暇村	0.6%	0.0%
少年・青年(自然)の家	0.1%	0.0%
民宿・ペンション	2.0%	0.8%
農山漁村民泊	5.6%	6.1%
その他	1.8%	0.4%
合計	100.0%	100.0%

図3 重点を置いた活動



番となっているが、原爆や戦争体験者の高齢化に伴い学校が重視する「体験者の講話」を聴くことが難しくなってきた。最近では、現地の学生が生徒を案内して戦跡をめぐるたり、生徒とともに「戦争と平和」に関するディスカッションを行ったりという新たな試みも見られるようになっている(図3)。

海外修学旅行は、社会のグローバル化が進展するなか、異文化に接することで生徒の視野を広げる重要な機会となるはずだが、それほどの増加は見られない。校外行事を実施するにあたり、学校は生徒の安全・安心の確保を第一に考えるが、それが海外となるとテロや感染症、対日感情など心配な点が多く、保護者の同意を得るのも難しい。これが、海外修学旅行の伸び悩みの要因と考えられる。旅行先として、かつてトップだった韓国が急減し、代わって台湾がその位置を占めるようになっているのは、このことをよく示している。

### おわりに——これからの修学旅行

教育課程に位置付けられている修学旅行が、学習指導要領に則って実施されることはいうまでもない。したがって、新学習指導要領の内容が今後の修学旅行を方向付けていくことになる。

新学習指導要領は、全ての教育活動において「主体的・対話的で深い学び」を実践することを定めている。そして特別活動では、とくに「体験的な活動」を通しての実践が重視されている。また、初めて「キャリア教育」という文言が高校の学習指導要領に登場し、特別活動はその要とされた。こうしたことを踏まえれば、生徒が事前に計画を立て、現地でそれに基づいて行動し、事後にそれを振り返るというプロセスの班別自主行動はまさに「主体的」な学びであり、今後の修学旅行において中心的な活動となっていくだろう。

また、旅行先の人々との交流は「対話的」な学びそのもので、生徒が自らの価値観を捉え直す好機となる。農山漁村での民泊は、それに相応しい「体験的な活動」であり、そこでの生業体験は勤労観・職業観を育てる「キャリア教育」としても効果が大きい。また、現地の学生とのディスカッションも「深い学び」につながっていく。

東日本大震災以来、修学旅行で地震や津波の被災地を訪れ「災害・防災学習」を行う学校も出てきた。国内修学旅行では、こうした新しい方向性をもつ修学旅行も現れてきている。

海外修学旅行は、考慮しなければならない要素も多く、旅行先は今後も変動していくことが予想されるが、グローバル化への対応として、実施する学校が増えていくことは間違いない。

修学旅行は、事前・事後の活動を含めれば学校において最も時間と費用のかかる教育活動である。したがって、それに値する学びの効果が求められるし、実際、生徒に与える影響は大きい。それぞれの学校が、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、学校の教育目標や生徒の実態に応じた修学旅行を実施するようになれば、必然的に旅行先は多方面となり、内容も多様になっていく。「学びの旅」としての修学旅行の今後の展開を注視していきたい。